

2-P-3

## 学びのプロセスの見える化にかかわる実践的研究

桐村豪文

中田康夫 高松邦彦

昨今大学教育において「学修成果の可視化」の必要性が言われている。中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では、「個々の大学が掲げる教育研究上の目的や建学の精神は、総じて抽象的であり、学士課程で学生が身に付けるべき学習成果を具体化・明確化していこうとする動向に照らしても曖昧であると言わざるを得ない。」と指摘されている。

本学ではこうした動向を受け、2017 年に「ときわコンピテンシー」を策定した。全ての科目はそれを意識した授業設計が求められる。「まなぶる▶ときわびと I」もその一つである。本研究では、同科目における「学修成果の可視化」の取り組みについて論じる。

「まなぶる▶ときわびと I」では、シラバスに掲げる 6 つの評価項目を踏まえ、より実践的な評価ツールとして「ルーブリック」を作成した。この科目では、一律にその到達度が評価可能な知識・スキルの修得は想定されていないため、学生一人ひとりの学修過程を丁寧に観察し、評価することが求められる。これは、担当教員全員に、極めて高度な評価力・観察力を求めるものである。「ルーブリック」は、それをサポートするものである。

授業終了時に学生対象に行ったアンケートでは、学生それぞれが「将来の職業において、もっとも重要と思うスキル」について、この授業を通して修得できたかどうかについて 81% (227/281) の学生から肯定的評価を得ることができた。

2-P-4

## 単球と好中球におけるプレセプシン産生機序の比較検討

溝越祐志

澤村 暢 鈴木高史

【背景】プレセプシンは敗血症時のバイオマーカーであり、単球および好中球の細胞表面に発現している CD14 が分解されたものである。今まで初代培養細胞を用いて検討されてきたプレセプシンだが、今回我々は細胞株でのプレセプシン産生モデル系の構築を目指し、白血病細胞株である HL-60 および、血球系以外での細胞株によるプレセプシン産生系を構築し、プレセプシン産生に関して新しい知見を得たので報告する。

【材料および方法】HL-60 に  $1\alpha, 25\text{-Dihydroxyvitamin D}$  を 100nM 添加し、単球系に分化させた後、大腸菌刺激によるプレセプシン産生を検討した。また、遺伝子導入により CD14 を安定発現させたヒト胚性腎臓 293T (HEK293T) を用いたプレセプシン産生を検討した。プレセプシンの測定には自動免疫発光測定装置パスファーストを用いた。

【結果と考察】1. HL-60 を単球系に分化させると CD14 の発現が促進され、大腸菌を添加することで培養上清中のプレセプシン濃度は有意に上昇した。2. CD-14 を安定発現させた 293T 細胞においてもプレセプシン産生が認められたが、大腸菌刺激によるプレセプシン産生は認められなかった。これらの結果よりプレセプシン産生には CD14 が刺激なしに分解されて生じる経路と、病原菌刺激による免疫細胞活性化により生じる経路の 2 種類が存在することが示唆された。